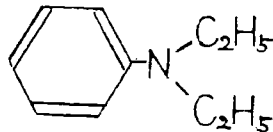


N,N-ジエチルアニリンの分解度試験成績報告書

1. 試験期間 昭和51年7月12日～昭和51年8月25日
2. 試料名 N,N-ジエチルアニリン (試料No K-237)
- 分子式  $C_{10}H_{11}N$
- 構造式



性 状

- 比 重 0.938～0.940
- 沸 点 216.5℃
- 溶解性 水に微量溶解、アルコール、エーテル、ベンゼンに溶解
- 経時変化 光により酸化を受けて色が濃くなることもある。
- ポリエチレン等プラスチックとの接触で長時間後に純度が低下することがある。(提示資料による)

3. 試験方法及び条件

環保業第 5 号  
薬 発第 615 号 } 微生物等による化学物質の分解度試験による  
49基局第 392 号 }

3.1 試験装置

酸素消費量自動測定機

3.2 酸素消費量測定

3.1 の記録による

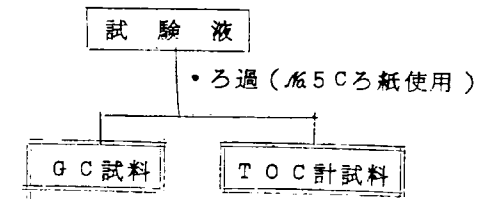
3.3 生分解試験後の直接定量法

(a) 使用分析機器

全有機炭素分析計

ガスクロマトグラフ 検出器 FID

(b) 分析試料の前処理



(c) 分析条件

全有機炭素分析計 (TOC 計)

流速 TC 回路 210 ml/min

温度 TC 炉 900℃

ガスクロマトグラフ (GC) 検出器 FID

キャリアガス  $N_2$

充てん剤 10%PEG 20M/セライト 545

ガラスカラム 2mmφ×1m

カラム温度 120℃

以下次頁に続く

#### 4. 試験結果

	分解度(%)	付 図	付 表
酸素消費量による結果	0	1	一
T O C 計による結果	1.0※	2	1
G C による結果	(-)※	3	2

※ クーロメーター2週間後水系の残留率が約60~70%  
であるため直接定量の分解度は参考値とした。

#### 5. 備 考

- a) 参考試験として供試物質の揮散性を経時的に開放系で試験したところ、14日後には約30%しか残留していなかった。(図-4参照)
- b) 供試物質の比重は0.940のため32 $\mu$ l分取し、試験に供した。
- c) 供試物質は水に難溶のためクーロメーター仕込時には液面  
にうすい膜状になつていたが2週間後には水に溶けていた。
- d) 2週間後のpH

基礎呼吸 7.15

水 系 7.35, 7.40

汚 泥 系 7.85, 7.75

以 上